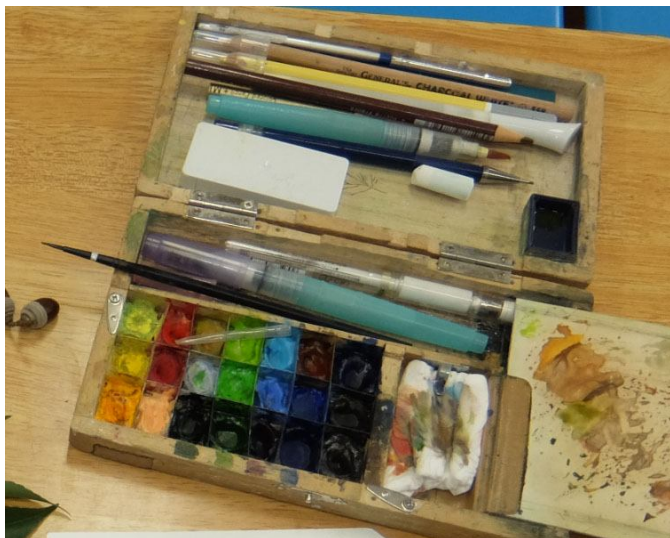


「樫の木の下で (6)」

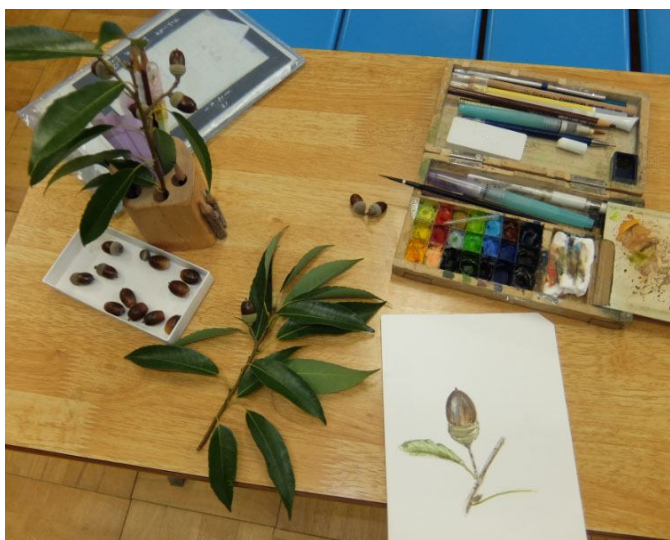
お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

子どもたちは自然の対象物を観察して、絵に描くことが好きである。花、葉、果実、種子、昆虫やその幼虫などだ。教師も一緒に夢中で観察することによって、子どもたちは、ますます意欲的になる。私もよく子どもたちと一緒に観察カードに描くことにしている。



これが私の観察道具だ。水彩絵の具 (21色)、水筆ペン、下絵の芯ホルダー、チョーク数色、細筆、色鉛筆、パステル鉛筆、白顔料ペン、ティッシュ、パレットなどが、ところ狭しと入っている。軽量化の為に、箱も桐材で自作した。これぞ「筆箱」である。

「水筆ペン」は、25年前に当方が考案して商品化されたもので、柄の中に水が入られ、筆洗不要で水彩を描ける。子どもたちでも楽に描ける。



私も「樫の実」を一枚描いてみた。最も難しいのは、形でも枝へのつきかたでもなく、「ドングリ表面の質感」である。あのツヤツヤ感が水彩画では、なかなか出ないのだ。こんな場合、私は白のチョークを使う。短くなったチョークを捨てずにとっておいて、光っている部分に使うのだ。チョークをのせたあと、少し指先でこすって広げると効果的だ。



私が描いているのを、子どもたちはズラリと取り囲み、物音一つさせずに「固唾をのんで」見守っていた。「ツヤツヤ感」が完成すると、「おわお〜%\$#@*+\$!!!」と歓声があがり、さっそく黒板の短いチョークを使って描いていた。この方法は、色鉛筆やクーピーの絵でも使えるのだ。



これも、同じ方法で描いた「コナラ」(ドングリ)の「芽生え」の様子である。割れれしまった種子からも、条件さえ揃えば発芽することがわかる。面白いので是非試してみしてほしい。